

青年期娘世代から見た「祖母—母—娘」三代の関係性

— visual narrative としてのイメージ画を通して —

西山 直子

1 問 題

1-1 世代間関係を扱った研究

1-1-1 発達早期の個人の発達観から生涯全般にわたる世代間関係へ

「人生 80 年時代」さらには「人生 100 年時代」と呼ばれる今日、人が生まれてから死ぬまでの生涯全般を見通した生涯発達心理学に関心が高まっている。発達心理学は、従来の乳幼児期から青年期までに偏重した発達観から脱却して、人間の生涯全体を視野に入れるようになった（バルテス, 1993/1987）。平均寿命の延びに伴う社会全体の高齢化の進行は、個人の一生涯の長期化のみならず、ともに生きる世代と世代との関係の長期化・重層化・累積化をも示唆する（藤崎, 2000；樋口, 2007）。複数の異なる世代の生涯発達過程が同時並行的に進行しているのだ。そのように、長期化した個人のライフスパンと周囲他者との関係性のなかで、いま、特に青年期～成人期以降の世代間関係の重要性が指摘されている（Hagestad, 2000；Swartz, 2009）。

1-1-2 「青年期—中年期—老年期」で構成される三世代への注目

家族発達の視点から見て、子どもが青年期に差しかった時期の三世代の関係性は興味深いものとして捉えられている（岡本, 1994；鏑, 2002；Zal, 1992）。なぜなら、三世代それぞれがライフサイクルにおける重要な課題を抱え、それらが家族のなかで渦巻く時期だからである。岡本（1994）によれば、青年期の子が自立を試みアイデンティティ形成の時期にあるとき、中年期の親は自分の人生の見直しと後半生へ向けての再方向づけというアイデンティティ再確立をはかっており、親の親である祖父母は老年期に達し自分の人生を振り返り死を受け入れるという、重要なアイデンティティの危機に直面している。こうして、個人と家族の発達の危機が交差する。

このように、ライフサイクル論の文脈においても注目を集める青年期以降の世代間関係、すなわち、「青年期—中年期—老年期」で構成される三世代家族に本研究は焦点を当てる。

1-1-3 「祖母—母—娘」という母系女性三代へ着目して

三世代家族といっても、祖父母、父母、孫（息子・娘）と、いくつかの種類の世代間関係が想定される。性別や続柄（父方・母方）によって、世代間の関係性の質に違いはあるのだろうか。

これに関連して、アイゼンバーグ（Eisenberg, 1988）は、青年期（大学生）の孫と祖父母との関係を質問紙調査により問い、孫と母方祖母との間の親密な活動を明らかにするととも

に、続柄による親密度の違いを「kinship」という概念で説明した。この仮説では、祖母と母、母と娘という二つの母娘関係によって家族の絆が強められ次世代へと引き継がれていくため、父方より母方の祖父母、さらには祖父よりも祖母のほうが孫にとって親密な対象となるはずだとする。この仮説を受け、前原・金城・稲谷（2000）はわが国で大学生と高校生を対象にした調査を行い、孫が意味づける祖父母の機能および祖父母に対する肯定的・否定的感情を明らかにした上で、それらが続柄の違いと孫の性によりどう異なるのかを検証した。その結果、孫息子は祖父母の続柄によって評価の違いを示さなかったのに対して、孫娘は父方祖父母よりも母方祖父母に対して多様な機能を付与し、とりわけ母方祖母の存在を高く評価したという。この結果により、前原ら（2000）はアイゼンバーグ（1988）の予想した母方祖母→母→娘という「kinship」の存在を確認した。他にも、家族内における異世代間の結びつきとして、母系の影響力の強さを示す知見が提出されている（Lowinsky, 1996/1990；Monserud, 2008；Smith, 2005；Trommsdorff & Schwartz, 2007）。

我が国においても、里帰り出産やその後の育児支援に見られるように、古来より女性が結婚後も実家との結びつきを強く保つ傾向がある。さらに、最近では、景気の低迷により雇用や収入が不安定化する若年層の親世代と比較的経済力のある祖父母世代との結びつきが強まるなかで、孫を介して三世代が交流・余暇・消費活動を楽しむ際に母方祖父母（母系）に偏る傾向があるとする調査結果も提出されている（北村, 2010）。

これらの先行研究の知見や現代の社会状況を勘案し、本研究では、家族内の世代間関係を取り上げるにあたって、特に、「祖母—母—娘」の母系女性三代の関係性に着目することとする。

1-1-4 長期的な時間軸を扱うナラティブ・アプローチとの結びつき

このように長期的・重層的な世代間関係を扱うために、いかなるアプローチが有効であろうか。

人生全般を見渡した漸成的発達図式で知られるエリクソン（Erikson, 1971/1964）は、自己完結性を持つ「個体のライフサイクル」と世代連鎖性を帯びる「世代間的ライフサイクル」をつなぐものとして、generativity 概念を提唱し（Erikson & Erikson, 2001/1982）、次世代をはぐくみケアする力、世代と世代とをつなぐ力を強調した。1990年代に入ると、この generativity が人生の物語を紡ぐうえで重要な概念として、マクアダムスとオービン（McAdams, D. P. & de St. Aubin, E., 1992；1998）などのライフストーリー研究者から大きな注目を浴びるようになった。

generativity 概念の研究がライフストーリー研究と結びつくことで発展を見せたように、世代間関係の問題も、ナラティブ・アプローチに基づいて考えると有効である（西山, 2010）。なぜなら、個人の一生涯を超えて世代と世代との関係性をも含みこんだ長期的な時間軸を扱うにあたって、過去から現在そして未来をつなぎ、自己と他者をつなぐ働きをもつ物語（やまだ, 2000）が、威力を発揮するからである。

そこで、本論文では、ナラティブ・アプローチの考え方に従い、幾重にも重なる世代間関係を分断することなく「関係性」そのものとして取り出すことができ、かつ、過去から未来にわたる長期的なタイムスパンを縮約して表現できる「イメージ描画法（Image Drawing Method:

IDM)」(やまだ, 1988)を用いて、現代日本の世代間関係の基本構図を描き出すことを試みる。

1-2 方法論の導入——イメージ描画法

1-2-1 イメージ描画法の特色と世代間関係を扱うにあたっての利点

イメージ画は、広義のことばや記号を用いたナラティブのうち、視覚的イメージや空間配置を重視したビジュアル・ナラティブ (visual narrative) の一種として位置づけられる。やまだ (2010) は、ビジュアル・メタファーを使ったモデルの長所として以下の4点を打ち出しており、これはイメージ描画法の特色をよく言い表している。「①複雑な関連性や思想をひとつのゲシュタルトとして全体的にまとめた意味内容や形で表す。②直観的イメージとして理解しやすく、伝達性に優れている。③包括的にも部分的に細分化した形で表すことができる。④同じイメージをもとに、深く読み込んだり、新たな関係性を加えたり、別の視点をもちこんだり、イメージの変革や再構成も促しやすい。」特に、本研究においては、世代間関係という複雑かつ多種多様な要素を含みうるイメージを、視覚的な描画にすることにより、全体を縮約した形で表現・伝達しやすくなるという利点がある。

1-2-2 イメージ描画法を用いて世代間関係を扱った先行研究

イメージ描画法を用いて関係性の基本構図を描き出す試みの代表的なものとして、やまだ (1988) の研究があげられる。やまだは1982年から5年間にわたり、女子大学生計約1500人(年齢幅18～20歳)を対象に、「幼いときのあなたとおかあさんの関係をイメージして自由に絵に描いてください。説明をつけ加えてください。」という教示のもと、「私と母の関係」イメージを絵に描くという大規模な調査を行った。大部分の学生に対しては、幼いときの対として現在の関係性イメージも描いてもらい、二段階に分けて「私と母の関係」を問うた。やまだはこの調査により、人と人との関係の根底となる二者関係の基本構図を、誰にとっても自分を考えるうえで無視することのできない重要人物 (significant person) である母親との具体的な関係から探ろうとしたのである。そして、やまだはこの研究の分析結果より、日本文化における母娘関係を表す基本形として《つつむ母といれこの私》の構図を導き出し、そこから派生するバリエーション豊かな包み方を示した。この基本構図は、幼いときのイメージだけでなく、青年期に達した現在の「私と母の関係」イメージにおいてもみられるものであり、ここからやまだは、過去から現在にわたる母子の関係性の変化において「変わらない私」の存在を示唆している。

1-2-3 イメージ描画法における描き手 (visual narrative の語り手) の視点の設定

上記のイメージ描画法を用いて世代間関係を扱った先行研究 (やまだ, 1988) では、「私と母」という青年期娘世代から見た二代の親子関係が取り上げられていた。本研究で扱おうとしている「祖母—母—娘」三代の世代間関係は、二つの母娘の親子関係の重なりと見ることもできる。「私」の視点として三者の立場が想定されるが、ここでは、親子二代を扱った先行研究と照らし合わせるため、三代の関係性を捉える視点を青年期娘世代に設定することとした。

2 目 的

「祖母—母—娘」という母系三代の世代間関係の基本構図を、イメージ描画法を用いて探る。その際、三代の関係性を捉える視点として、青年期～若い成人期を生きる「娘」の立場を設定し、やまだ（1988）が提示した「私と母」の二者関係の基本構図が三者関係においてどのように適用されるか、モデル構成的現場心理学（やまだ，2002）の観点から検討する。さらに、イメージ描画法に過去・現在・未来という時間軸を含めることで、ビジュアル・ナラティブ（visual narrative）としての三代の関係性イメージの語られ方の特徴を明らかにすることを目指す。

3 方 法

3-1 調査協力者

青年期～成人期初期の女子学生（平均年齢 20.7 歳）。近畿地方の複数の大学で調査協力を依頼し、授業時間や授業後の休み時間を利用して調査を実施（2006 年 6 - 9 月）。文学部や教育学部等の人文系学部所属の大学生が 7 割を占める。調査用紙は計 231 部配布し、107 部回収（回収率 41.9%）。そのうち、絵による記入がなく説明文のみによる回答だった 7 部を除き、有効回答数 100 部。年齢・家族構成等を問うフェイスシートの集計によると、調査協力者（娘世代）の母親の年齢は 40 代 55%、50 代 40%、母方祖母の年齢は 60 代 11%、70 代 49%、80 代以上 27%であった。母方祖母の健康状態は健在 64%、病気がち 9%、病院などで療養中 6%、すでに亡くなっているのは 18%であった。母方祖母との同居経験を聞いたところ、同居経験無し 74%、乳幼児期のみ同居 4%、学童期まで同居 7%、そして青年期以降現在も同居しているのが 8%であった。なお、父方祖母との同居経験もほぼ同程度の割合だったが、青年期以降現在も同居しているのが 16%と母方祖母の倍の割合であった。

3-2 調査手続き

調査用紙（A4 版）はフェイスシートと 3 枚のイメージ画記入用紙により構成されており、協力者は鉛筆やペン等を用いて自由に絵を描くとともに、簡単な説明書きを付すことが求められた。調査内容は、「1. 幼いときの、あなたとお母さんとおばあさん（母方）の関係をイメージして、絵に描いてください。説明をつけ加えてください。」「2. 現在の、～（以下同文）」「3. 未来の、～（以下同文）」を設問とし、「祖母—母—娘（私）」三代の関係性のイメージを、各時期それぞれ 1 枚、計 3 枚の絵で表現するというものであった。

3-3 イメージ画分析手続き

3-3-1 分析の方針

基本的にはイメージ画（絵）による表現を中心に分析する。ただし、絵に付された説明書きも加味して総合的に判断する。絵と説明書きとが大幅に矛盾する場合は、絵のほうを優先する。

3-3-2 分析の手順

分析では、イメージ画データをひとつひとつ丁寧に観察して、「祖母／母／娘（私）」の三者がどのような位置関係でもって表現されているかを知り、その配置の「基本形 Fundamental Figure」をモデルとして取り出す作業を行った。分析を行うにあたって、やまだ（1988）の「母子関係の網目モデル（network model）」を参考にした。このモデルは、母と子を描いたイメージ画からその配置に着目してボトムアップに練り上げられたもので、『つつむ母といれこの私』『ならぶ母と私』『むきあう母と私』などのさまざまな母子関係の基本形を多次元的な核としてつくられるネットワーク構造を編み出している。これを二者関係の基本構図として用いることで、「祖母」を加えた三者関係の基本構図を捉えやすくなると考えた。

ここで行われた分析作業は、モデル構成的現場心理学（やまだ，2002）において「モデル I：基本要素（Element）」を取り出すべく、集められた個々の生データの具体的なイメージから、ある観点に着目してカテゴリー作成を行う過程にあたる。なお、このカテゴリー作成の段階では、3つの時期のうち最もバリエーション豊かに表現されていた幼いときのイメージ画データをもとにして行われた。そして、ここで作られたカテゴリーをもとに現在・未来のイメージ画データを分類した。実際の具体的な分析はやまだ（2002）に従い、以下のような手順で進められた。

a) 収集された生データの加工・編集　まず、集められたイメージ画の生データ（A4 版）を4分の1の縮小コピーにしてカード化し、全体を見やすく扱いやすくした。カード化することにより、複数のイメージ画を一面に広げて比較可能になる。この縮小化は、KJ 法（川喜田，1967）において、データを切片化し、カードに書き出してラベル化し、一枚の模造紙のなかに全体が見渡せるように配置する作業と共通している（やまだ，2002）。

b) 縮小加工したイメージ画データの観察　次に、縮小加工したイメージ画のデータ束を、ひとつひとつ丹念に観察した。そのうえで、構図的特徴の似たもの同士を集めては突き合わせ、共通点を書き出し、いくつかのグループに分けることを試みた。カテゴリー分類の基準を作成するため、一度つくったグループを解体してはまたグループ分けする作業を繰り返し行った。

c) イメージ画データの質的典型性と多様性の発見　そして、いくつかに分かれたグループのなかで、そのグループの特徴を端的に表した「モデル図」と、代表的な「典型例」、そこから派生する多様な「具体例」をまとめて、イメージ画データのカタログを作成した。

d) 「三代の関係性パターンの基本形」の抽出　上記 c) の作業によって見出されたイメージ画の典型例をもとに、4つの「三代の関係性パターンの基本形」を取り出し、三者の位置関係・配置上の特徴から、それぞれ《2 + 1 関係》・《三角関係》・《並ぶ関係》・《包む関係》と名付けた。

e) イメージ画の時系列的変化の検討　上記 d) で見出された4つの関係性パターンの基本形を手がかりに、幼いとき／現在／未来の三代の関係性イメージの時系列的変化を追った。

4 結果と考察

4-1 関係性パターンの基本形

上記の手順に則ったイメージ画分析により導き出された4つの関係性パターン（《2+1関係》・《三角関係》・《並ぶ関係》・《包む関係》と命名）のそれぞれの定義と分類基準、及びモデル図・典型例・具体例（図1）を順に示す。なお、図1の（ ）内の記述は、データの識別番号（数字の前の記号はD:母方祖母との同居経験あり、B:母方祖母との同居経験なし・別居）と、その絵が幼いとき／現在／未来のいつの時期のイメージとして描かれたものかを示している。

4-1-1 《2+1関係》

a) 定義 一組となる二者と離れた一者により構成される関係性。

b) 分類基準 ①一組となる二者は、他の一者よりも近接して描かれる、あるいは丸で囲まれるなどして一組であることが明確に示されている。②一組となる二者は、同じ形や姿勢・格好によって同質性や類似性が認められる。③一組となる二者と離れた一者との間には、境界を示す線あるいは明らかな距離的隔たりがある。これら3つの分類基準全てを満たすものを《2+1関係》とみなす。なお、三者のうち一者が絵に登場せず、二者の関係のみが取り上げられている場合もここに含んだ。一組となる二者の組合せには、〈娘と母〉・〈娘と祖母〉・〈母と祖母〉の3つがある。

4-1-2 《三角関係》

a) 定義 三角形を基調とした構図で示される関係性（上下が反転した逆三角形の構図も含む）。三者は三角形の各頂点に配置される。

b) 分類基準 上の定義内容をすべて満たすもの。三者がただ単にばらばらに描かれているものは含まず、三角形をなすように線や矢印により結ばれているものをここに含んだ。

4-1-3 《並ぶ関係》

a) 定義 三者が一行に並んだ構図で示される関係性。

b) 分類基準 並び方には縦並びと横並びの二種類があるが、上下関係を示す垂直軸が入った縦並びの構図はほとんど見られなかったため、ここでは横並びの構図を基本形とする。三者は正面を向いてただ並び立つのではなく、手をつなぐ、あるいは線や「=」等の記号で結ばれている。

4-1-4 《包む関係》

a) 定義 他者を包む、あるいは他者から包まれるような構図で示される関係性。やまだ(1988)の《つつむ母といれこの私》を基本とする。

b) 分類基準 三者のうち誰かが誰かを自分の領域内に含むあるいは包むようにして描かれているものをここに分類する。完全に閉じられた空間ではなくても、包み込むような形状が

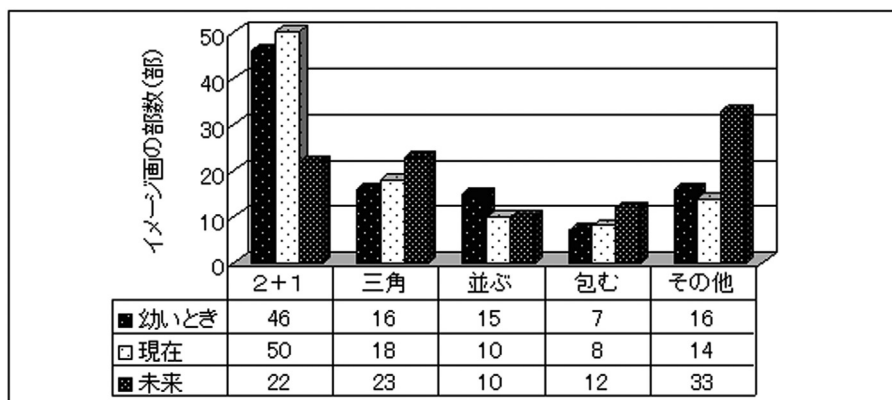
みられるものは同種とみなした。

4-1-5 「関係性パターンの基本形」分類内訳

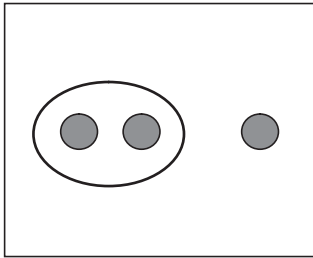
これら4つの基本的な関係性パターン（《2+1関係》・《三角関係》・《並ぶ関係》・《包む関係》）がどのような割合で見られたのか、その分類内訳を表1に示す。なお、分類は筆者単独で行い、複数の判定者による一致率は算定していない。分類基準の明確化と分類の妥当性の検証は今後の課題である。ここで内訳結果を示すのは、基本的な関係性パターンとして見出された4つが量的に多数であったからという理由ではなく、質的に典型的・代表的な配置のものを抽出していることを明らかにしておきたいがためである。特に幼いとき・現在において《2+1関係》で描かれる関係性パターンが中心的なものであることがうかがえるが、これは、対人関係の基本が個人と個人の二者関係であり、それにもう一者が加わった構図であるためと考えられる。

表1 「関係性パターンの基本形」分類内訳

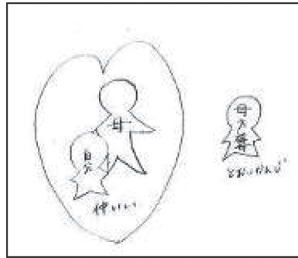
※図表中の数値は分類された部数（部）を示す。



《2+1 関係》



モデル図

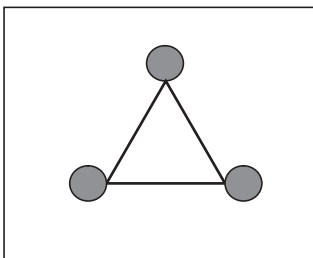


典型例 (B237 幼いとき)

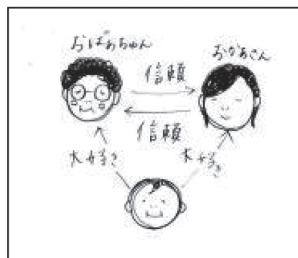


具体例 (B229 幼いとき)

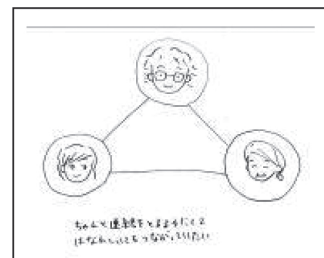
《三角関係》



モデル図

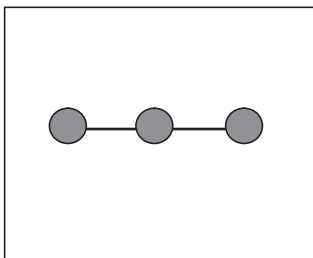


典型例 (B231 幼いとき)



具体例 (B113 未来)

《並ぶ関係》



モデル図

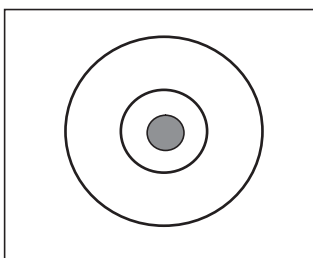


典型例 (D225 幼いとき)

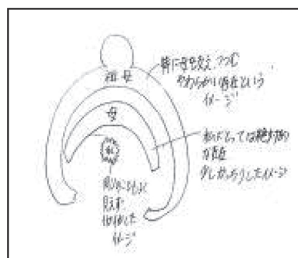


具体例 (B002 未来)

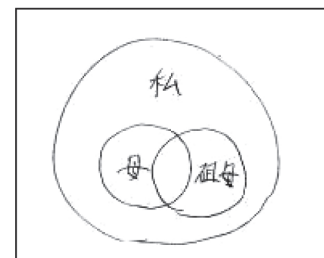
《包む関係》



モデル図



典型例 (D018 幼いとき)



具体例 (D019 未来)

図1 「関係性パターンの基本形」モデル図・典型例・具体例

4-2 関係性パターンの時系列的変化

4-2-1 《2+1関係》組合せの変化

《2+1関係》を構成する一組となる二者の組合せには、〈娘と母〉・〈娘と祖母〉・〈母と祖母〉の3種類がある。この組合せの変化を見ることにより、《2+1関係》で示される関係性の時系列的变化を追うことができる。

幼いときに〈娘と母〉の組合せを示す例（図2-1、2-2）は、別居や交流機会の少なさによる祖母との物理的・心理的距離を反映していると考えられる。一方で、母親が仕事等で出掛けているあいだ祖母に預けられ面倒を見てもらっていた場合には、〈娘と祖母〉という組合せもある（図2-3）。つまり、幼いときのイメージでは、居住形態や接触頻度といった現実的な事情と、それに基づく心理的距離感が組合せの仕方に影響を及ぼしている。それらに対し、〈母と祖母〉を一組とする例では、絵のなかに「私」（娘）が描かれていなかったり、離れたところから〈母と祖母〉の二者を眺めていたりする構図が典型的であった（図2-4）。未来において〈娘と母〉の組合せとなるのは、娘が成長し母と対等に並び立つようになり、母は年老いた祖母（母の母）を気にかけて距離を置いている例である（図2-5）。また、祖母の亡き後には、残された母娘二人が必然的に結びつき、それを天上から祖母が見守るという構図が典型的に見られた（図2-6）。

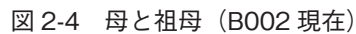
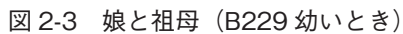
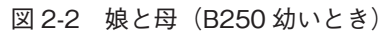
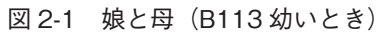
これらの結果からわかるのは、この《2+1関係》の関係性パターンのなかでは、隣り合う二つの世代（すなわち〈娘と母〉および〈母と祖母〉の二つの母娘関係）の結びつきが比較的強いと認識されているということだ。ひとつ世代を隔てた〈娘と祖母〉の組合せももちろんないわけではないが、幼いときに祖母と同居していたり面倒を見てもらっていたりした場合に限られた。なお、《2+1関係》において一組となる二者の組合せの仕方で、典型となる時系列的变化は見られなかった。ただし、3つの時期を通して《2+1関係》の構図的特徴を保ったまま、組合せを変えて関係性の変化を表現する例は見られた。

4-2-2 《三角関係》逆三角形から三角形へ

《三角関係》の構図で表される関係性で特徴的な時系列的变化は、〈逆三角形〉から反転して〈三角形〉へと位置取りを変える変化である（図3-1）。ここに示したのは、幼いときには祖母と母が上に位置する〈逆三角形〉の構図だったものが、「祖母—母—娘」という系列順の縦の《並ぶ関係》を経て、今度は祖母を頂点とし自分と母が底辺に位置する〈三角形〉の構図へと変化した例である。この変化は、《三角関係》の関係性パターンの構図上の特徴として、上下関係を示唆する垂直軸が含まれているためと考えられる。幼いときから現在にかけては自分より上に立つ存在として母や祖母を認識し、その庇護の下に自らを位置付けていたのが、未来には母と同じ地平線上に並び立てるようになると展望されている。しかし、依然として祖母は母娘の上に配置されている。これは、自分とは次元の異なる、乗り越えられない偉大な存在として祖母が認識されていることの表れではなかろうか。こういった傾向は、祖母が天上の人となった場合に顕著であった。

4-2-3 《並ぶ関係》並び順の変化

《並ぶ関係》においては、同一地平線上に立ち同じ方向を向いて並び立つことで、対等性を



- 388 -

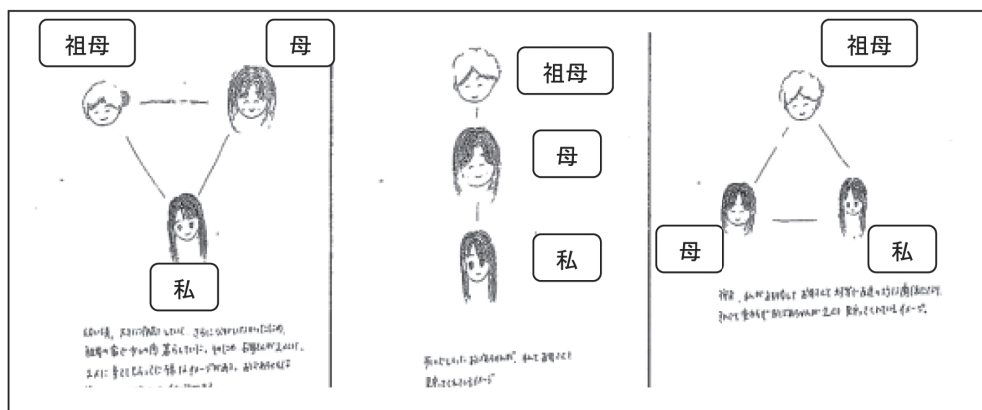


図 3-1 《三角関係》時系列的変化の典型例 (D010)

左から幼いとき／現在／未来。〈逆三角形〉から縦の《並ぶ関係》を経て〈三角形〉の構図へ。



図 3-2 《並ぶ関係》時系列的変化の典型例 (B002)

左から幼いとき／現在／未来。娘を中心とした《並ぶ関係》から、〈母と祖母〉の組合せの《2 + 1 関係》を経て、再び、今度は母を中心とした《並ぶ関係》へと構図変化。

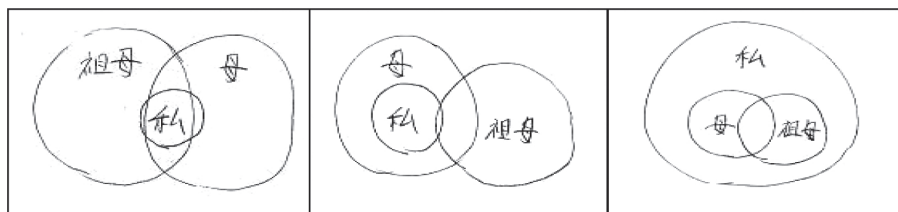


図 3-3 《包む関係》時系列的変化の典型例 (D019)

左から幼いとき／現在／未来。祖母と母の二人から〈包まれる〉私から、未来には立場が逆転して、祖母と母を〈包む〉私へと大きくなっている。

図 3 《三角関係》《並ぶ関係》《包む関係》時系列的変化の典型例

4-2-4 《包む関係》包まれるものから包むものへ

《包む関係》の時系列的変化で特徴的だったのは、幼いときにはもっぱら母や祖母に〈包まれる〉存在であった娘が、未来には逆に母や祖母を〈包む〉存在へと成長する変化である（図3-3）。やまだ（1988）は、《つつむ母といれこの私》の未来予想図で見られた、娘と母の立場が入れ替わる構図を、「包むものと包まれるものが逆転しても、この構造そのものは変化しない」として、「変わらない私」の範疇に入るとしている。本研究においても、包まれるものから包むものへと立場が逆転しても、関係構造は変わらないものとして受けとめることとした。

5 まとめ

以上より、「祖母—母—娘」三代の関係性を示す基本的な構図として、《2+1 関係》《三角関係》《並ぶ関係》《包む関係》の4つの関係性パターンが見出された。それぞれの関係性パターンのなかで、幼いとき／現在／未来の3つの時期を通して、《2+1 関係》では一組となる二者の組合せの変化、《三角関係》では逆三角形から三角形への変化、《並ぶ関係》では並び順の変化、《包む関係》では包まれるものから包むものへの立場の変化が見られたが、全体として構図の特徴は維持されていた。祖母や母、娘といった個人に焦点を当てれば、確かに三代の関係性の有り様やそのなかでの個人の役割は変化していく。しかし、「祖母—母—娘」という三代の関係性を全体としてとらえれば、その構造はある一定のパターンをもってイメージされ、その枠組みのなかで役割や立場の変化が描かれていることが明らかになった。

この結果を、ナラティブ・アプローチの観点から捉えなおすと、「祖母—母—娘」三代の関係性の時系列的変化は、青年期娘世代のそれぞれのイメージのなかである一定の類型をもった物語の形式を取り、そのストーリーにしたがって役割や登場人物を変えつつ進行していると考察される。このように、世代間の関係性の推移に一定の類型をもった物語の形式があることにより、これから家族の物語の一頁に足跡を残そうとする青年期娘世代が、連綿と続く世代間の関係性の歴史のなかに自らを組み込み、位置づけ、未来を展望することが容易になると考えられる。

ただし、これは、虐待や世代間断絶など負の関係性構造、およびそういったネガティブな物語形式がそのまま継承され、連鎖することを肯定するものではない。Visual narrativeとしてのイメージ画のなかで、幼いとき／現在／未来を通して関係性の組み換えが行われたように、人は、いつでも、人生の物語の主体として自らの物語を書き換え語り直すことができる。このように、世代間の関係性を、過去・現在・未来という時間軸を含んだ物語として捉えることで、関係性の編み直しや新たな関係性の生成を展望することができる。

引用文献

- バルテス. (1993). 生涯発達心理学を構成する理論的諸観点—成長と衰退のダイナミックスについて. 東洋・柏木恵子・高橋恵子 [監訳]. 生涯発達の心理学 1 巻 (pp.173-204). 東京: 新曜社. [Baltes, P. B. (1987). Theoretical propositions of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, 23(5), 611-626.]
- Eisenberg, A. R. (1988). Grandchildren's perspectives on relationships with grandparents: The influence of gender across generations. *Sex Roles*, 19, 205-217.

- エリクソン, (1971). 洞察と責任. 鍾幹八郎 [訳]. 東京: 誠信書房. [Erikson, E.H. (1964). *Insight and responsibility*. New York: W.W.Norton & Company.]
- エリクソン, E.H.・エリクソン, J.M. (2001). ライフサイクル、その完結〈増補版〉. 村瀬孝雄・近藤邦夫 [訳]. 東京: みすず書房. [Erikson, E.H. & Erikson, J.M. (1982). *The life cycle completed: A REVIEW*. New York: W. W. Norton.]
- Hagestad, G.O. (2000). Adult intergenerational relationships. *Generations and gender programme: Exploring future research and data collection options* (chapter 4). New York and Geneva: United Nations.
- 樋口恵子. (2007). 祖母力——娘・嫁・息子を救い孫を守る愛の手. 東京: 講談社.
- 藤崎宏子 [編]. (2000). 親と子——交錯するライフコース. 京都: ミネルヴァ書房.
- 川喜田二郎. (1967). 発想法. 東京: 中央公論社.
- 北村安樹子. (2010). 世代間関係にみる「子孝行」と「母系」シフト. ライフデザインレポート, 194, 50-52.
- ローウィンスキー. (1996). 母たちの母——女性の心 (psyche) の中で祖母の力. 川戸圓・リース 滝 幸子 [訳]. 女性の誕生 (pp.125-141). 東京: 山王出版. [Lowinsky, N.R. (1990). Mother of mother: The power of the grandmother in the female psyche. Zweig, C. [Ed.], *To be a woman: The birth of the conscious feminine* (pp.86-97). New York: G.P. Putnam's Sons.]
- 前原武子・金城育子・稲谷ふみ枝. (2000). 続柄の違う祖父母と孫の関係. 教育心理学研究, 48(2), 120-127.
- McAdams, D. P. & de St. Aubin, E. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015.
- McAdams, D.P. & de St. Aubin, E. [Eds.]. (1998). *Generativity and adult development: How and why we care for the next generation*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Monserud, M.A. (2008). Intergenerational relationships and affectual solidarity between grandparents and young adults. *Journal of Marriage and Family*, 70(1), 182-195.
- 西山直子. (2010). 世代間関係における Generativity の可能性——Narrative Approach の立場から. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 345-357.
- 岡本祐子. (1994). 人生の正午——中年期. 岡本祐子・松下美知子 [編], 女性のためのライフサイクル心理学 (pp. 177-200). 東京: 福村出版.
- Smith, P.K. (2005). Grandparents & grandchildren. *The Psychologist*, 18(11), 684-687.
- Swartz, T.T. (2009). Intergenerational family relations in adulthood: Patterns, variations, and implications in the contemporary United States. *Annual Review of Sociology*, 35, 191-212.
- 鍾幹八郎. (2002). アイデンティティとライフサイクル論. 京都: ナカニシヤ出版.
- Trommsdorff, G., & Schwarz, B. (2007). The “intergenerational stake hypothesis” in Indonesia and Germany: Adult daughters’ and their mothers’ perception of their relationship. *Current Sociology*, 55(4), 599-620.
- やまだようこ. (1988). 私をつつむ母なるもの——イメージ画にみる日本文化の心理. 東京: 有斐閣.
- やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味——なぜライフストーリー研究か?—. 教育心理学年報, 39, 146-161.
- やまだようこ. (2002). 現場 (フィールド) 心理学における質的データからのモデル構成プロセス——「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に. 質的心理学研究, 1, 107-128.
- やまだようこ. (2010). 時間の流れは不可逆的か?——ビジュアル・ナラティブ「人生のイメージ地図」にみる、前進する、循環する、居るイメージ. 質的心理学研究, 9, 43-65.
- Zal, H.M. (1992). *The sandwich generation: Caught between growing children and aging parents*. New York: Plenum Press.

(日本学術振興会特別研究員 教育方法学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

Visual Narratives of Relationships among Grandmother-Mother-Daughter from the Viewpoints of Young Adult Daughters: Using the Image-Drawing-Method

NISHIYAMA Naoko

This study explores how young adult daughters represent their life stories and the relationships with their mothers and grandmothers in a context of maternal kinship. The temporal perspective was expanded from a life span to a generative lifecycle span and from one generation to several generations. The participants were 100 female Japanese university students (average age 20.7 years). Using the freehand Image-Drawing- Method (IDM), they were asked to draw images of their (1) past, (2) present, and (3) future relationships with their mothers and maternal grandmothers. The data were analyzed using a qualitative method based on “the visual network model of the mother-self relationship” (Yamada, 1988). Four fundamental patterns of early childhood images were identified: “dyad and one,” “triangle,” “side by side,” and “wrapped.” The patterns of early childhood tended to continue throughout the three life stages, though positions or roles were changed. For example, in a typical life story of “wrapped,” a daughter was wrapped in love during her early childhood, but later in life she would envelop and care for others. Although the status of individuals changed, their life stories of relationships continued over generations.